

2012年3月14日

天塩川流域市町村長

各位様

サンルダム事業を再検討する  
新たな「検討の場」としての運営を望みます

北海道脱ダムをめざす会

謹啓

厳しい寒さも過ぎ徐々に春の気配が感じられるころとなりました。各位様にはそれぞれ市町村の行政運営のため努力されていることに敬意を表します。

さて、天塩川水系河川整備計画が策定され、サンルダム建設事業が盛り込まれております。しかし、ご存知のように国交省は従来のダム建設を一度立ち止まり考え方をリセットしようとしております。

その内容は流域自治体首長の皆様・住民や学識経験者などの意見を聞き幅広く検討し、できるだけダムに頼らない治水への転換を掲げ、事業の必要性や投資効果を検証するとしています。

「コンクリートから人へ」は象徴的な言葉です。国交省はこれらを具体的に検討するための「有識者会議」を立ち上げ、中間取りまとめが出されました。そして流域市町村長の皆様による「検討の場」へと進み、すでに4回開催されております。

1998年(平成10年)12月に北海道開発局(旭川・留萌開発建設部)が、流域全世帯に「今後の川づくりのためのアンケートのお願い」を実施しました。1993年のサンルダム建設事業着手の5年後です。

その結果「天塩川の治水について、洪水・土砂災害に対し、安全だと思いますか」との問いに、「安全だと思う・ある程度安全だと思う」との回答が89%でした。また、洪水対策として具体的に進めてほしいことでは、「河岸保護工 37%、堤防の完成 25%、内水対策16%、河道の掘削15%、ダムの整備7%」でした。このダムの整備を求めた中には、サンルダム建設を推進した天塩川治水促進期成会等があり、さらに地元下川町・名寄市民の思いが含まれてのことです。もちろん建設地周辺の建設業者が期待希望しての数値も含まれると考えられます。しかし、7%だったのです。

2010年8月天塩川下流部の洪水被害では、天塩川の内水氾濫が一部にありましたが、被害のほとんどが、支流やその支川の氾濫などで、農地や家屋被害がありました。この時サンルダムがあったとしても、効果は出せません。近年、天塩川が直接原因の被害は減少しております。アンケート結果から流域住民は、それぞれの地域の具体的な治水対策の必要性を望んでいると言えるでしょう。

水害にはそれぞれ原因があり対策も違います。このような社会資本整備は地元業者による事業ができ、地域振興にもなります。

天塩川について多様な治水対策の検討が「検討の場」で求められていますが、委員である皆様は「サンルダム本体建設早期着工の陳情合戦」に終止し、正常に機能しているとは思われません。

流域市町村長の皆様には、もう一度住民の立場でそれぞれの治水対策について再検討されることを望みます。

天塩川水系河川整備計画ではダム建設を優先して、現実に住民が困っている内水・外水氾濫対策が見落とされ、参議院で質問趣意書が出されても国交省(開発局)は整備しようとしません。それは、下川町名寄川頭首工右岸の外水氾濫対策としての築堤、音威子府村箴島の内水氾濫対策等です。これらにサンルダム効果は期待できません。

国家財政の厳しさは今後も続くと考えられます。有識者会議の求めた「ダム以外の治水対策」について住民からの提案も含め、具体的に調査・検討し、無駄の少ない効果的な対策が提案・比較され、国家・国民・住民のため新たな「検討の場」になることを強く望みます。お計らいくださいますようお願いいたします。

流域の将来のため無駄のない、適切な治水対策を望み末筆とさせていただきます。

謹白

#### 北海道脱ダムをめざす会構成団体

- ・(社)北海道自然保護協会 会長 佐藤謙
- ・十勝自然保護協会 共同代表 安藤御史・佐藤与志松・中村廣治
- ・北海道自然保護連合 代表 寺島一男
- ・富川北一丁目沙流川被害者の会 代表 中村正晴
- ・平取ダム建設問題協議会 代表 松井和男
- ・苫小牧の自然を守る会 代表 舘崎やよい
- ・ユウパニコザクラの会 代表 藤井純一
- ・イテキ・ウエンダム・シサムの会 代表 佐々木義治
- ・胆振日高高校退職教職員の会 代表 高橋 守
- ・自然林再生ネットワーク 代表 前田菜穂子
- ・下川自然を考える会 会長 千葉永二
- ・サンルダム建設を考える集い 代表 渋谷静男
- ・環境ネットワーク旭川地球村 代表 山城えり子
- ・大雪と石狩の自然を守る会 代表 寺島一男
- ・旭川・森と川ネット21 代表 平田一三
- ・当別ダム周辺の環境を考える市民連絡会 代表幹事 安藤加代子